

# マネキンガールの発生と意義

Occurrence and Significance of Mannequin Girls

関 智子

Tomoko SEKI

## はじめに

マネキンとは、衣料品を着せて店に並べられた人形のことで、流行の服やコーディネートを着せて展示することによって販売促進を狙う意図で用いられる。1911年に関節のある腕を持つ衣服の着脱可能なマネキン人形がトリノ博覧会で発表され、このピエール・イマン製のマネキン人形は日本にも輸入されていた。<sup>1)</sup>しかし、マネキンという言葉はディスプレイ用の人形だけではなく、店頭で販売促進を行う人間にもその名称を用いる。現代でマネキンと称される人は、デパートやスーパーなどで試食販売や実演販売などの商品宣伝や販売促進を行う販売員を指す。このような人をマネキンと呼ぶことはアパレル業界に端を発するとされ、かつてはそれを「マネキンガール」や「マネキン嬢」と呼んでいた。しかし、マネキンガールは職業として成立した直後の混乱等も相まってか、一部の研究や書籍でマネキンガールに触れたものは見られるものの、現在でも成立の過程など一部が錯綜したままの状態にある。本研究では、マネキンガール成立当時の新聞雑誌等を元に情報の整理を行い、その発生と意義について述べていく。

## マネキンガールとは

マネキンガールの名称が世間に認知されたきっかけは1928(昭和3)年10月に新聞に掲載されたとされるマネキンガール募集の広告<sup>2)</sup>である。それから約1年後の1929(昭和4)年9月に刊行された思想用語辞典<sup>3)</sup>では「マ

ネキン」の解説のなかでマネキンガールの言葉に触れている。

マネキン(英 Mannequin)呉服店などの標本人形衣裳人形。近頃のマネキン・ガールといふは、この人形の代わりに婦人がその役をこなすもの。<sup>4)</sup>

また、1930(昭和5)年刊行の『英語から生まれた現代語の辞典』ではマネキンガールを「百貨店、化粧洋品店、洋品店等に期間を定めて雇用され商品の宣伝をなす職業婦人。語源はManuequin(洋服屋等で用ひる廣告人間)或はmanikin(美術家の木像)と云はれてゐる」<sup>5)</sup>と説明している。また、1931(昭和6)年の『モダン新語辞典』では次のように説明している。

マネキンの本来の意味は、畫家や彫刻家の用ひる人體模型、洋服屋の胴體模型であるが、轉じて「生ける人形」即ち百貨店などの陳列臺やショウウィンドに立つて、流行の衣裳や装身具を纏つて、顧客の注目をひき、購買心をそゝり、商品の宣傳をつとめる婦人の新職業である。<sup>6)</sup>

これらの辞典から、マネキンガールの仕事は百貨店のショーウィンドーや店内で衣服や化粧品、装身具の宣伝を行うことで顧客の関心を引き、購買意欲を高めることであったとわかる。

### マネキンガールの興り

日本において人間がマネキンを務めた最初の例については諸説あり、職業としてマネキンガールの名称が広まった昭和時代初期の雑誌や新聞記事では大礼記念国産振興東京博覧会における高島屋の出品で用いたことが最初であると書くものが多くみられる。高島屋以外では1914(大正3)年の御大典記念大正博覧会の「美人島」がある。美人島は入場料を払うことで会場に入ることができ、そこで電気や光線、鏡を用いて女性たちが摩訶不思議な空間<sup>7)</sup>にいるかのような演出を見ることが出来る余興であった。1926(大正15)年に大阪で開催された電気大博覧会でも女性がマネキンのような役割を務めたが、その女性が後に「美装員」と呼ばれ、のちにマネキンと呼ばれるようになったと述べているものもある。<sup>8)</sup>しかし、前述の辞書の説明にあるマネキンガールの意味に照らし合わせると、商品の販売促進を目的とせず、単なる客寄せや見世物としての役割を担った博覧会の女性たちはマネキンガールに該当するとは言いがたい。

日本で人間がマネキンを務めた記録について今回見つけることができた最も古いものは、1927(昭和2)年9月17日の読売新聞に掲載されている高島屋に関する記事であった。記事では「新流行語 マネキン 新築高島屋の新催し 日活スター出演 百選會の新流行商会に美しい日活のスターが衣装を付けて高島屋のステージで我國最初のマネキン供覧—(十五日より廿一日まで)」<sup>9)</sup>と報じられている。このときの日活スター、酒井米子・衣田光子・木下千代子・浅野雪子・築地浪子<sup>10)</sup>が国内で初めて人間がマネキンになった事例であると思われる。また、このときに新聞が流行の衣服をまとった人間をマネキンと称したのは、海外では人形の代わりに流行の衣服を着せて宣伝を行う人間を人形と同じくマネキンと称しており、国内の雑誌でもマネキンの存在について触れられるな

ど<sup>11)</sup>、その存在がすでに知られていたためだと考えられる。

この後も高島屋は人間をマネキンとして宣伝に用いている。例えば1928(昭和3)年3月24日から5月27日まで東京上野公園において開催された大礼記念国産振興東京博覧会の様子を高島屋は次のように書き残している。

高島屋の出品としては單獨の出品をなさず、百貨店協會特設館に東京五大百貨店聯合して陳列したるは「晝に遊ぶサロン」と題して艷麗なる式衣裳を着飾りたる數多くの人形を排したるものなりしが、この現代日本流行の先端を行ける人形の中に高島屋出品としては、特に眞物の美しき婦人を一人「ソファア」に坐らせたるを以て、觀衆をして「やア、人形が動いた」と大騒ぎをなさしめたるは、特に異彩を放ちたり。<sup>12)</sup>

『高島屋百年史』には「大禮記念國産振興東京博覧會」出品」と題された写真が掲載されており、洋風の内装の空間にいる振袖姿の女性が5名の内2名がソファアに座っている。恐らくその写真が上記の展示を記録した写真だと思われる。また、同年に大阪で開催された「天平文化宣陽会」でも高島屋は人間をマネキンとして用いた宣伝活動を行っていた。<sup>13)</sup>天平文化宣陽会が何月に開催されたかは定かではないが、『近代歌舞伎年表京都篇』<sup>14)</sup>の1928(昭和3)年6月1日から開催される催しの紹介の中に「天平文化宣陽会記念劇」の記述が見られることから、天平文化宣陽会自体は6月1日を含めた数日間で開催されていた可能性が高い。さらに、1929(昭和4)年の「マネキン・ガールの日記」内には「昨年の九月、同じ高島屋では、日活女優の酒井米子や梅村蓉子などに、流行の衣装を着せて、映畫の場面を默劇で演じさせたこともある。」<sup>15)</sup>とある。このように高島屋は人間のマネキンを何度も宣伝に活用していた。

また、同記事内には他の呉服店が人間に流行

の衣服を着せて宣伝を行っていたことも記されている。それによると、1928（昭和3）年9月20日と22日に銀座の松坂屋では松竹鎌田の佐々木清野と若葉信子が衣装を着て挨拶に出たほか、同年9月23日から25日まで三越ではファッションショーの催しで水谷八重子に流行の衣服を着せたとされる。名古屋の十一屋では芸者をマネキンに使用した<sup>16)</sup>とされ、東京のみならず他の地域でもマネキンを用いることが行われた。こうした人間によるマネキンの普及の様子は、1927年12月に「マニカンと云つたかしら、衣裳を着けて店内を歩いたり飾窓で立つて見たりするモデル女。あれが居ないのは寂しい」<sup>17)</sup>、1928年5月に「百貨店が客の購買心を惹く爲め美装員と稱し人形の代りに本物の美人に衣裳をつけ、これを百貨店の一部に設けたる舞臺にて展覽せしめる思切つた遣口（中略）百貨店は問題と致し居らず、益々盛になりつゝある」<sup>18)</sup>と書かれた記述が見られることから、上記で挙げた例以外にも人間によるマネキンは盛んに用いられていたと考えられる。

### マネキンガールの呼称

人間がマネキンを務めた例は複数あったが、その呼称はマネキンガールではなかった。先に挙げた1927年9月17日の読売新聞では、衣装を身につけた日活の女優をマネキンと称している。また、1927年11月刊行の『婦女界』でも以下のように単にマネキンと記述している。

#### ◎フワツシヨンシヨウとマネキン

外国では流行品の陳列会を、フワシヨンシヨウといつて、その最新流行の衣裳を生きた人に着せて——マネキンといひます——飾窓に立たせたり、店内を歩かせたりするのです。日本では人形を用ひましたが、今度高島屋呉服店が第一番に、女優に着せてこのマネキン（口繪参照）を応用しました。間もなく松坂屋呉服店でも、マヌカンと称して同じようなことを致しまし

た。<sup>19)</sup>

このように、衣装を身につけて宣伝を行う人間は単にマネキン（マヌカン）もしくは美装員（びそういん）と呼ばれていた。1928（昭和3）年10月刊行の『大日本百貨全集第32巻』では美装員の文字にマネキンガールのルビが振られているのを確認できるが、人間によるマネキンの呼び方がマネキンガールで定着したのは、丸菱呉服店による広告記事がきっかけであると思われる。

丸菱呉服店は、1928（昭和3）年11月に、呉服売り場の木枠で囲った一区画に近代的な応接室兼休憩室のセットを作り、そのなかで丸菱呉服店考案の新柄の衣装を着せたマネキンガール7名<sup>20)</sup>を歩きまわらせるという宣伝を20日間行なった。<sup>21)</sup>このときのマネキンガールを務めた7名は、高島屋や他の百貨店がマネキンに用いたような有名人ではなく、一般人の女性であった。それまでのように女優をマネキンとして用いなかったのは単に丸菱呉服店の懷具合<sup>22)</sup>によるところかもしれないが、「懸賞図案の当選品を女優に着せて躍らせるなど、日本の流行陳列会に、マネキンを応用することが今秋から初まりました。併し今の処では衣裳を見るより、女優の顔を見るフワンが多いので、今の処疑問のようです。」<sup>23)</sup>とあるように、商品ではなく女優を見るだけの観衆を忌避した可能性も考えられる。

一般人であった7名がマネキンガールとなったきっかけは、新聞に出た広告を見て自ら応募したことに端を発する。残念ながらその広告の原文は確認できていないが、7名のマネキンガールの内一人がどのような広告内容であったかを残している。1929（昭和4）年2月刊行の『婦女界』において「マネキン生活の二十日間」という表題で、清子という人物がマネキンとして勤めた20日間を振り返った記事が載せられている。その中で「マネキンガール数名募集、容姿上品にして、相当教養のある十七才より

二十五才迄の女子日給三円以上五円迄」との短い広告が、ふと眼についたのは、十月二十九日の夜の事だつた。」<sup>24)</sup>と、その広告の内容について触れている。同記事内で清子が「マネキンといふ言葉は、昭和二年の十一月号の『婦女界』で初めて知つたもの。」と述べているのは、前述の高島屋の件である。人間によるマネキン自体はこの丸菱呉服店の募集広告以前から存在していたことはこれまで述べてきた通りだが、それをマネキンガールと称して広く周知させ、それまでは女優などがその役に就いていた人間によるマネキンを、ひとつの職業として確立させるきっかけとなったのは丸菱呉服店が行った20日間の宣伝であるといえる。当時の雑誌のなかには「丸菱呉服店がマネキンの元祖」と書いたものがある<sup>25)</sup>ことから、丸菱呉服店によってマネキンガールの存在が強く印象付けられたことがわかる。そして、このときの素人マネキンのうち数名は1929(昭和4)年にマネキンガールの派遣会社を発足し、商品の広告宣伝を専門業務とするマネキンガールという職業を確立した。以上のことから、マネキンを務めた日活スターたちもマネキンガールの系譜としてはそこに含めることができるが、一つの職業としてマネキンガールを述べていくのであれば、丸菱呉服店以降を指すと考える。

### 東京マネキンクラブ

丸菱呉服店による素人マネキンが大きな話題となった数か月後、「東京マネキンクラブ」という名のマネキンガールの派遣会社が発足された。代表を務めたのは丸菱呉服店と同じ建物に店舗を構えた丸の内美容院の経営者、山野千枝子(1895-1970)である。丸菱呉服店ではなく山野がマネキンクラブの代表を務めることになった経緯については、丸菱呉服店の素人マネキンたちが客先に立つ前のヘアメイクから着付けまでを丸の内美容院が一手に引き受けていた<sup>26)</sup>ことと、山野自身のマネキンへの熱意が要因にあったと思われる。山野本人の談によるが、

1927年9月の高島屋による最初のマネキン使用も、山野が持ちかけたものであった。<sup>27)</sup>1928年3月の大札記念国産振興東京博覧会についても高島屋の依頼により山野が彫刻絵画のモデルをマネキンとして斡旋<sup>28)</sup>している。このことから考えると、丸菱呉服店が宣伝のためにマネキンガールの使用を考えた発想の元には、山野の存在や助言があったのではないかと推測される。また、山野は1918(大正7)年にアメリカに留学し、ニューヨークのワナメーカービューティスクールで美容について学んでいる。山野は留学先でマネキンという職業を知り、その存在を日本で活用する機会をうかがっていたことも考えられる。しかし一方でマネキンガールを派遣するという業務形態については、中山太陽堂の手法を真似たという可能性も考えられる。中山太陽堂は1903(明治36)年創業の化粧品を取り扱う会社である。そして自社の化粧品を用いた美装員を百貨店に派遣<sup>29)</sup>することを1928年2月時点ですでに行っていたとされる。

中山太陽堂は、1923(大正12)年に創立20周年記念事業として中山文化研究所を創立した。この中山文化研究所が美装員の募集とオーディション及び養成を行ったとされる。1928(昭和3)年1月13日の大阪朝日新聞には、オーディションの途中経過に関する記事が掲載されている。記事は次の通りである。

大阪の百貨會ではさきに『容姿端麗な飛切り美人』を募集したところ、我からあつぱれ美人と名乗つて集まつたもの五十餘名そのうちから十五歳より二十六歳までの美人二十八名を豫選し更に最後のベストエイトを選抜するため十二日中山文化研究所で首實驗を行つた。

◇

『美装員』は月給五十圓程度、平生は文化研究所で結髪、着付、美容などのおけいこをし、また、茶の湯や作法を習ひ、百貨店



から注文が来ると、宣傳衣裳を着ていろいろな催しものを後援する<sup>30)</sup>

この記事には美装員の候補である女性8名の顔写真の掲載もあるが、ここから更に試験を経て5名へと絞られる予定であるとも書かれている。中山文化研究所の美装員は同年2月8日の大阪三越白山紬宣伝会で初披露された。この時の宣伝方法は商品である着物を着せた美装員が茶席でお点前を見せるという手法であった。押すな押すなの大盛況で、美装員が着用した衣装が一番売れたようだが、商品である着物よりも美装員の顔ばかりが注目を集めていたようである。<sup>31)</sup>

前述の通り、マネキンガールという名称が世間に広く認知されたことでマネキンガールという職業が確立したといえるが、業態のみ見るのであれば、マネキンの公募や派遣は中山文化研究所が丸菱呉服店や東京マネキンクラブより先に行っていたといえる。

マネキンガールという言葉の影響により婦人の新しい職業として脚光を浴びた東京マネキンクラブは、1929（昭和4）年2月には活動を始めており、『三越』の表紙と口絵にもマネキンガール5名の姿が確認できる。写真に添えられた文章には「最近新しく組織されました東京マネキン倶楽部の諸嬢が三越美容部の結髪化粧に同じく、三越意匠部の訪問服をつけてズラリと並んだところです。」<sup>32)</sup>とあり、東京マネキンクラブでの活動が始まっていたことがわかる。東京マネキンクラブは本格的に活動を始める前から百貨店との交渉を行ったとされており<sup>33)</sup>、1929（昭和4）年3月<sup>34)</sup>の発足式直後から百貨店でマネキンガールを用いた宣伝<sup>35)</sup>が相次いで行われた。百貨店以外でもマネキンガールはさっそく起用されており、東京マネキンクラブ発足後に契約を結んだ資生堂は、同年6月にマネキンガールを使用して商品の大々的な宣伝を行っている。<sup>36)</sup> このことから、マネキンガールが百貨店や化粧品業界から宣伝広告媒体と

して期待されていた様子がわかる。

世間の注目を集め、百貨店との繋がりを得た状態で始動した東京マネキンクラブであったが、発足と同年の8月に早くも組織が分裂することとなった。きっかけは東京マネキンクラブに所属するマネキンガールの自殺未遂というセンセーショナルな事件が起きたことであった。それを発端に、マネキンガールへ支払われる報酬の半分ほどをマネキンクラブに納めさせていた<sup>37)</sup>ことが暴露された。さらに無許可営業<sup>38)</sup>であったとの疑いが持たれ、取調べを受けるに至った。そして8月16日の読売新聞に「公開状 マネキン脱退派から山野さんへ」と題した文面が所属するマネキンガール3名の連名によって公開され、東京マネキンクラブは解散する運びとなった。その後、東京マネキンクラブから脱退したマネキンガールたちは、マネキンガールの元祖と言われる駒井玲子と共に新たにマネキンクラブを発足した。このマネキンガールの脱退劇については山野を陥れるための濡れ衣<sup>39)</sup>だと書く雑誌もあったが、真相は分からない。しかし、東京マネキンクラブでの待遇に不満を抱いたマネキンガールが複数存在し、クラブから脱退したことだけは事実である。

駒井らが新たに結成したマネキンクラブは、元々所属していた山野を代表とするマネキンクラブと同名の「東京マネキンクラブ」を組織の名称とし、1929年8月17日に発足式を行った<sup>40)</sup>。山野も再びマネキンクラブを結成したが、その名前は「日本マネキンクラブ」となった。<sup>41)</sup>その後、マネキンクラブは複数設立され、1935（昭和10）年時点で東京には日本マネキンクラブ、東京マネキンクラブ、銀座マネキンクラブ、不二マネキンクラブ、フタバマネキンクラブの5つが存在した。また、このとき東京マネキンクラブを脱退していた駒井が主催するファン・フォン協会でもマネキンの派遣を行った。<sup>42)</sup>

マネキンガールの働き方は当初、マネキンガールが所属する会社から各現場へ派遣される方

式であったが、のちに三越や資生堂などは専属のマネキンガールを自社で雇用するようになる。1932(昭和7)年の読売新聞には、三越の専属であるマネキンガールの写真が掲載されている。<sup>43)</sup> 資生堂の専属マネキンガールは公募で募った良家の子女9名を1933(昭和8)年9月から養成を開始し、1934(昭和9)年4月4日に「ミス・シセイドウ」の名で活動を開始した。なお、ミス・シセイドウの養成課程における「新美粧法と宣伝術」の科目は、このとき資生堂意匠部に籍を置いていた駒井が担当している。<sup>44)</sup> 資生堂のように専属のマネキンガールに独自の名称を付けることは森永製菓でも行われており、「スイートガール」と称していた。スイートガールの名称は1935(昭和10)年刊行『万国新語大辞典』にも記載があり、「云はば會社直屬のマネキンと云つたやうなもの。その職務は會社より派遣されてスマートな洋装で販賣店の店頭に立ちいつもスイートな笑顔を見せながら新商品の宣傳を行ふのである。先般森永キャンデーストアでお目見得して講評を博した」と解説されている。専属のマネキンガールを持つ動きをみせたのは、「頼まれれば味噌、醤油のマネキンまで引受けるといつたヨロヅ屋マネキンでは、その個々の商品に関する知識は望む方が無理で、サテこそ専属マネキンを養成しようといふ傾向が現れたのです。」<sup>45)</sup> とあるように、この頃には単に商品への注目を高めるだけでなく、商品への造詣の深さもマネキンガールに求められていたためだと考えられる。

### マネキンガール、駒井玲子

「マネキンの元祖」、「マネキンガール第一号」などと一部で称されるのが駒井玲子(1908-1942)である。駒井の出身地は鳥取県鳥取市、本名は長谷川清子である。<sup>46)</sup> マネキンの元祖と言われる駒井であるが、前述の通りマネキンとしての役割は高島屋の日活スターや中山文化研究所の美装員が先に果たしている。さらに、丸菱呉服店が採用したマネキンガールの7名に駒

井がいたかも定かではない。山野による東京マネキンクラブが発足する直前の1929(昭和4)年2月に『婦女界』や『全関西婦人連合会』において、「清子」「K子」という名前で丸菱呉服店でマネキンとして採用に至るまでとマネキンとしての20日間を語った素人マネキンがいる。駒井の本名と同じ清子であるが、彼女は駒井ではなく田中清子であると考えられる。

田中清子は丸菱呉服店の素人マネキンの一人であったと考えられる。それは1929(昭和4)年2月の『三越』に東京マネキンクラブのマネキンガールとしてその名を連ねていることや、同年3月刊行の『朝鮮公論』において「私がこれから始めようとする仕事それはこの新しい商品の媒介者即ちマネキンについてありますが私自身日本で初めての婦人職業たるマネキンとして最初のスタートを切つた二三の経験を土臺として今後自らマネキンとして研究をつづけると共に」<sup>47)</sup> との発言から、このインタビューがなされた時点ですでにマネキンとして働いた経験を有していたとわかるためである。また、「清子」「K子」はどちらも雑誌の中で「思ひ切つて夫に相談して見る」、「良夫に相談してみたら」などとの発言から夫人であったことがわかるが、一方で駒井は読売新聞に同年9月に掲載された連載「婿えらび」<sup>48)</sup> のインタビューにおいて初恋の人との付き合いが続いていることと、しかしその人とは結婚しないつもりであると答えている。このことから駒井が未婚であったといえる。さらに、山野が「マネキン発達史」で語るには駒井がマネキンクラブに加わったのは同年6月<sup>49)</sup> のことであったという。同年2月の『三越』に写真の掲載がある東京マネキンクラブのメンバーにも田中清子を初め大崎千代子、田村はる江、花田千鶴子、三浦栄子の名はあるが、駒井の名前はみられない。また、1936(昭和11)年当時に活躍した女性を紹介した『俎上の名流婦人』内において「昭和三年初めてマネキンの倶楽部を創めたのは山野千枝子さんですが、この時の新聞廣告を見て駆けつ

け、第一線に立つて新職業をやつてのけたのは駒井玲子さんです。」<sup>50)</sup>と書かれた通りであるのならば、駒井がマネキンクラブに加わったタイミングは山野による東京マネキンクラブ発足後であるといえる。

マネキンガールの中でも駒井が特に著名である理由は、「読者は恐らく、婦人公論や近代生活、その他の雑誌の座談会で彼女がマネキンを代表して堂々たる理論を述べてゐるのを記憶してゐられるだらう。」<sup>51)</sup>と当時から言われるように、マネキンガールとして働くだけではなく、数々の雑誌で美容について語るなど、世間の目に触れる機会が多かったためだと思われる。また、先に触れた資生堂専属のマネキンガール「ミス・シセイドウ」の設立にも関わるとともに、「資生堂新美粧法実践」と題した早化粧・薄化粧・モダン化粧についての講演<sup>52)</sup>を東日本の販売会社所在地及び函館・小樽でも行うなど、表舞台に立ち続け、人々の注目を集め続けていたことも一因だと思われる。<sup>53)</sup>

### マネキンガールの仕事

ここまで述べてきたように、マネキンガールは衣服や化粧品品の宣伝手法の一つとして誕生した存在である。しかし人間がマネキン人形に代わってその役割を担う必要があったのだろうか。もともとマネキンは海外からの輸入品であったこともあり、高価なものであった。国内産のマネキンにあたる陳列人形も百貨店で用いられていたが、人形の拙さで衣装を台無しにしてしまうこともあった。<sup>54)</sup>そんなマネキン人形の借用料は一月月 50 円から 100 円以上<sup>55)</sup>であることを考えると、60 円で 20 日間雇われた丸菱呉服店のマネキンガールはマネキン人形一体と同等の値段であったといえる。かかる費用が同程度であるならば、美しい見目と話題性を兼ね備えたマネキンガールの需要が高まるのも当然であるといえる。

高島屋が大礼記念国産振興東京博覧会で人間によるマネキンを室内風のセットに据えたのを

真似たのか、初期のマネキンガールは室内風のセットの中が仕事の間であった。しかし、山野による東京マネキンクラブ発足からわずか3か月後の6月、早くもマネキンガールの仕事に変化が見られるようになった。マネキンガールの居場所はショーウィンドーへと移動し、身につけた衣服を宣伝するのではなく、ショーウィンドー内に居るマネキンガールを以て注目を集め、手持ちの看板で商品の広告を行うようになったのである。その様子は新聞にも取り上げられており、「マネキン・ガールは利用範囲を一步ひろげて新しい商品の広告に使はれたした。最新流行の洋装を均整のよくとれた彼女の體にまとい、ガラス箱——街頭からは箱としか見えない——の中にすつくと立つ。両手に新商品の広告を記した紙板を持つ」<sup>56)</sup>や、「近代人の要望は百貨店内のセットで衣裳や美容の生きた見本としてのマネキンを遂に歩道に面したショーウィンドウの中に迄追ひやつた。(中略)彼女達は商品の廣告板を持つて右に左に三段モーション」<sup>57)</sup>と書かれている。雑誌『サラリーマン』もマネキンガールの宣伝効果を試すために、1929(昭和4)年6月17日に自社の雑誌を宣伝するマネキンガールを丸の内ビルディングの白木屋が持つショーウィンドーに看板を持って立たせており、<sup>58)</sup>その時の看板を持ったマネキンガールは翌月の『サラリーマン』の表紙を飾っている。その宣伝効果については、「この日丸ビル富山房の「サラリーマン」の売り上げは記録を破った」とあり、衣服や化粧品以外でもマネキンガールによる広告宣伝効果があったことがわかる。マネキンガールで大衆の注目を集めることで盛況を得られるためか、マネキンガールが宣伝を行う商品の対象は拡大していった。とある家具店では新式洗濯板を売り出す際に、若く華奢なマネキンガールを雇い、店頭で洗濯のデモンストレーションをすることで、華奢な娘でも力が要らず洗えると視覚的に合点させることで売り上げを伸ばした。<sup>59)</sup>さらに農産物の宣伝<sup>60)</sup>にもマネキンガールは用いら

れた。マネキンガールが宣伝を行う対象物の多様化は、『小間物・化粧品業界年鑑 昭和9年版』でも触れられている。

ほんとうは衣装を見せるための蠟製の人形のことであるが、日本ではマネキンガールと云つて、実際の人間を指してゐる。美装員などといふ□語も出来たが餘り使はれず、マネキン嬢が一番よく通るようになった。現在は呉服屋と化粧品屋の宣傳にしようされるのが主であるが、その他家庭用品についてはたいていの場合が有効である。日本で使はれた最初は、マネキン嬢が来れば客が集まるといふことも言へたが、今日では、美装して人の目を惹くといふ機能よりも、商品の特色、用途を親切に説明する、すなわち説明販売員として新しい働きを認められるやうになった。使用者も従つてそういふ目的に備ふのが多い。<sup>61)</sup>

このように、商品宣伝の手段としての有効性から、様々な商品宣伝にマネキンガールが活用されるようになっていたことがわかる。しかし、説明販売員としての働きを求められるようになったともあるように、仕事の間や宣伝を行う商品が変わっただけではなく、宣伝方法にも変化が見られるようになった。ショーウィンドーの中で看板を持っている時点ではまだマネキンガール自体の求心力で商品を宣伝するという段階であったが、次第にマネキンガールが自ら商品を説明し、売り上げに貢献することを求められるようになった。1935(昭和10)年刊行の『婦女界』でも、マネキンガールの仕事内容の変化について次のように述べている。

百貨店又は個人商店に雇はれて、化粧品、呉服物、小間物、食料品などの宣傳廣告をするのが主な仕事ですが、廣告寫眞のモデル等にも頼まれます。(中略) 以前は美貌が第一条件になつてゐましたが、今ではそ

れよりも人好きのする明るい感じの人、健康で熱心な忠實な人、高等女學校卒業程度の學力ある人ですが、特に音聲と言葉遣ひとが重視され、地方訛の濃厚な人は適しません<sup>62)</sup>

学力や訛りのない話し方が求められていたことから商品説明をするための能力が重視されていたことがわかる。1937(昭和12)年刊行『婦人文芸』では、マネキンガールの吉田秀子が当時の現状について語っており、駒井が登場したばかりのマネキンガール初期と異なり、今は声を枯らして宣伝を行つても客を惹きつけることができない<sup>63)</sup>と、マネキンガールが居るというだけでは十分な宣伝に繋がらなかった様子がわかる。マネキンガールにセールストークが求められるようになったためか、1940(昭和15)年の『職業指導の研究』が女子に適した職業を「知性」「技術」「労務」を主とする職業の三つに分けて紹介するなかで、マネキンガールは教師や婦人記者、薬剤師と同じ知性を主とする職業に分類されている。<sup>64)</sup> 時の話題としての鮮度を失ったマネキンガールが宣伝媒体として存続するためには、言葉で商品を宣伝できることを強みにするほかなかったのではないと思われる。

商品を客に直接説明して売り込むという役割に落ち着いたマネキンガールの仕事は、結果的に店先に立つ販売員と同じになったわけであるが、それならば現在のアパレルショップのように店員に商品を着せて見本とすることでも良かったように思われる。しかし、1928(昭和3)年2月時点で「以前はよく流行の着物を、美人の店員に着せたものであるが、お客様は、店員が着てゐるのではと、妙な所で臍をまげてしまつて、一向効果がない。」<sup>65)</sup>と述べられている。このことから、マネキンガールという職業として確立したからこそ一般の女性が呉服販売の広告宣伝としての役割を発揮することができたともいえる。



### おわりに

集客のための話題作りとして女性を用いることは美人島などが先例として存在するが、美人島は入場料を支払って観覧するものであり、販売につなげるための宣伝広告としての役割を担っていたわけではない。商品の販売につなげることを目的とした宣伝広告という意味では、高島屋が用いた日活スターがマネキンガールの興りと言える。その後、マネキンガールは丸菱呉服店の素人マネキン募集を契機に一つの職業として確立されたが、マネキンガールの職務内容や派遣という勤務形態については山野による東京マネキンクラブよりも先に中山文化研究所が美装員という名称を用いておこなっていた。マネキンガールの需要に関しては、洋服の普及とも時期が重なるためにその要因に含まれるようにも感じるが、1930（昭和5）年の東京マネキンクラブを取材した雑誌内で、「断髪ガールがマネキンガールに一人もゐないのが何だか不思議にも思われるが、仕事が限定されて仕舞ふのでその存在が役立たないのだそうである。」<sup>66)</sup>とあるように、マネキンガールの需要が洋服ばかりに傾いていたわけではないことがわかる。また、マネキンガールの活躍の場が早々に衣服や化粧品以外の商品に広がっていったことから、洋装の広まりがマネキンガールが生まれた主たる理由だとは言い難い。マネキンガールの発生からを辿る限り、マネキンガールを依頼する店の一番の目的は商品の宣伝広告にあり、マネキンガールは宣伝を行う商品や対象に合わせてその在り方を変えていったのである。

### 注

- 1) 三宅五穂：「マネキンの歴史と V・MD について」『繊維誌 42（4）』、日本繊維製品消費科学会、2001、p.218
- 2) 丸菱呉服店が行った一般人からマネキンを募集する内容の新聞広告。
- 3) 春秋社発行の『大思想エンサイクロペディア』。

その凡例に「凡そ思想に直接に、間接に關係せる術語用語、社会に於ける活用語等を厳密に拮据して可及的に多く収録することを主眼とし」とあり、新しい文化や現象についての説明を試みた辞書だといえる。

- 4) 『大思想エンサイクロペディア』、春秋社、1929、p.300
- 5) 英文大阪毎日学習號編輯局：『英語から生まれた現代語の辞典』、大坂出版、1930、p.389
- 6) 『モダン新語辞典』、1931、p.413
- 7) 「最新學述を應用し、總て電氣の光線と化學の作用により、奇々怪々或いは幾丈とも知れぬ深き井戸内に鯉と美人の同棲あり、或は断崖絶壁、月世界、蟹氣樓上等に、美人の活動するなど、不可思議なる迷宮を實現せしむべし」（向上社編輯部編：『大正博覧会と東京遊覧』、向上社、1928、p.514）
- 8) 「大正十五年頃大阪で行なはれた電氣博覧會か何かに二人の女が、陳列ケースのなかで何かやつたのが、後に美装員と呼ばれ、マネキンと謂はれるに至つたものである。」（谷孫六：『宣伝時代相』、春秋社、1931、p.144）
- 9) 読売新聞、1927年9月17日朝刊、3頁
- 10) 東京日日新聞（1929年7月6日）『新聞集成昭和編年史昭和4年版3（七月～九月）』、新聞資料出版、1989、p.56
- 11) 「一流の店で新しい意匠を作り出し、それをマニカンに着せてお客様を招待いたします。マニカンといふのは流行の着物を着てそのスタイルをお目にかける女のことで、若い人や中年のや痩せたのや肥つたのや、それぞれ自分の身に合った新しい意匠をつけて、それぞれこそ惚々するやうな美しい姿をして現れます。」（若杉文子：「歐米社交界の回想 ロンドン・パリ・ロスアンゼルス色彩」『婦人の国』2（2）、新潮社、1926、p.95）
- 12) 『高島屋百年史』、高島屋、1941、p.303
- 13) 「天平文化宣陽會に關して大阪高島屋では美装員に天平美人を扮せしめたがこれが服装に就いて本會より指導した。」（『風俗研究』（96）、

風俗研究会、1928、p. 3) なお、美装員もマネキンガールを指す言葉の一つである。

14) 『近代歌舞伎年表京都篇 8: 大正 12 年～昭和 3 年』、八木書店、2002、p.626

15) 『全関西婦人連合会』 6 (2) (51)、全関西婦人連合会、1929、p.13

16) 平澤恂: 「成功した店頭装飾方法 マネキンガールと其廣告効果」『実業の日本』 32 (7)、実業之日本社、1929、p.172

17) 「銀座と百貨店」『文芸春秋』 5 (12)、文芸春秋、1927、p.137

18) 『実業』 12 (5)、実業社、1928、p.55

19) 瑠璃子「逸品會・松美會・百選會を觀て」『婦女界』 36 (5)、婦女界出版社、1927、p.276

20) 募集広告には 140 名ほどの応募があったとされるが、応募人数に関しては約 200 名と書くものもある。また、採用された人数に関しても 9 名と書いたものも見られるが、後述の丸菱呉服店でマネキンガールを務めた「清子」「K 子」の談で 7 名とあることから、このときの採用人数は 7 名であったと考えられる。

21) 前掲書 (15)、p.13

22) 丸菱呉服店の創始者である美川多三郎は、1927 (昭和 2) 年 4 月には 10 万円の債務を残して丸菱の経営から離れており、美川の後任も債務の整理を行うことなく、1929 年 1 月に背任横領で訴えられた。

23) 前掲書 (19)

24) 『婦女界』 (39)、婦女界、1929、p.209

25) 「丸菱——マネキンの元祖さ。」(『文芸春秋』 8 (3))、文芸春秋、1930、p.125

26) 前掲書 (24)、p.210

27) 「昭和二年四月に行なはれたる東京高島屋百選會招待の席上、熱心にファッションショウの時代の要求たる所以を述べたがこの案は高島屋小川支配人を動かし、安芸の百選會には、日活女優酒井米子、築地浪子の二人をモデルとして、ファッションショウの形式を以て、始めてマネキンたる名稱によつて新廣告媒體として婦人モデルが廣告界に紹介されることになつた」

(東京小間物化粧品報社編: 「マネキンの發達史」『小間物化粧品年鑑 昭和 10 年』、東京小間物化粧品報社、1935、p.172)

28) 「昭和三年東京に開かれた御大禮記念博覽會に於ける百貨店協會館に高島屋ではマネキンの使用を計畫し、山野氏に依頼したが、當時はマネキンなる言葉は既に生まれてゐたが、これを職業とする者は未だなく、山野氏は彫刻繪畫のモデル周旋業宮崎よりモデルを雇入れ斡旋をなした。」(前掲書 (27))

29) 「中山太陽堂では御手の物の化粧をした美装員を養成し、各百貨店の注文に応じ派出する新營業を開始し、相當繁昌いたしおるやに聞及び候」(前掲書 (18)、p.55)

30) 『新聞集成昭和編年史昭和 3 年版 3 (一月～三月)』、新聞資料出版、1989、p.170

31) 前掲書 (30)、p.498

32) 『三越』 19 (2)、三越、1929

33) 「丸ビルー□□□□□容院内院内にマネキンクラブなるもの□□□運動が起り、先づ第一に發火点其館の□粧品店等と結び、大體三越、白木屋、高島屋、松屋等の間に具体的の交渉まとまつたので、先月二十二日その發足式がまるびる精養軒に於て行はれた」(前掲書 (16))

34) 1929 年 2 月から東京マネキンクラブという名称での活動がみられ、註 34 の引用文では 2 月に發会式をあげたとあるが、当時の新聞では 3 月と報じられていることから、本論のなかでは發足式は 3 月に行われたものと解釈する。

35) 「山野氏はこれまで、會員せいどによる俱樂部組織のマネキン團體の設立を志してゐたが、後援者たる各百貨店側の注意によつて、これを營業的の團體となすことに決意し、當時三越の廣告部長たりし松宮三郎氏、高島屋小川支配人、松屋佐久間廣告部長、松屋小林専務等の後援により、日本に初めてのマネキン團體は、東京マネキン俱樂部なる名稱の下に、二月發会式をあげたのであつた。かくて三月初旬には、高島屋、松屋、三越と各百貨店に於て相次いでマネキン使用の宣傳が行はれ、六月には資生堂

の新歯磨きニューミックスの宣傳に使用され」(前掲書 (27))

36)『資生堂宣伝史 1 (歴史)』資生堂、1979、p.79

37)「理由は一日の報酬十圓を現在の如く五圓を經營者に渡し手取り五圓で化粧費其他の雜費を差引いた残額では常雇ひではないだけ生活が不安であること」(『職業婦人のトップを切るマネキンをめぐって渦を巻く醜い争い』読売新聞、1929年6月25日朝刊、12頁)

38)「警視庁保安部風紀係では九日午前九時丸ビル内丸之内美容院主(自宅市外中野三一〇三)山野千枝子を商館取調べを行つた(中略)經營するマネキンガール紹介業が何等の許可を得ず右は内務省令の營利職業紹介取締り規則に反するのでその點について取調べたようである」(朝日新聞、1929年8月10日夕刊、2頁)

39)「最初宇田川某は、マネキン倶楽部の創立を企てたが、一足お先に山野に創立されて、然かも山野の創めたマネキンが世間の大人氣に投じ、成績がドンく上がる所から、宇田川某は口惜しさで一杯であつた。(中略)自殺未遂事件が起つたので、己の鬱憤を晴すのは此時とばかり、某新聞社の記者と結託して、根も葉もない事を出任せにシヤベリ、新聞紙に大々的に書き立てさせたのである。」(『実業の世界』26 (10)、実業之世界社、1929、p.112)

40)「職業婦人の第一線に 昨日東京マネキン倶楽部の發會式 山野千枝子の日本マネキン倶楽部の解散と同時に新たに出來た東京マネキン倶楽部は去る十二日警視庁の許可を得たのでその發會式を十七日午後三時から銀座の千正屋で行つた」(鈴木小春浦編：『切抜帳』10、鈴木小春浦・国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/p.id/1702744> (2023年9月25日閲覧))

41)「田中、大崎、駒井等の花形マネキンは山野氏の下を脱退、丸菱呉服店廣告部長宇田川氏を參謀として新たに會員制度の東京マネキン倶

楽部を創立、山野氏は□東京マネキンを日本マネキン倶楽部と改稱」(前掲書 (27)、p.173)

42)『現代女子職業読本』、経済知識社、1935、p.252

43)読売新聞、1932年6月30日朝刊、9頁

44)前掲書 (36)、p.84

45)読売新聞、1933年9月19日朝刊、9頁

46)『鳥取県史近代 第4巻(社会篇・文化篇)』、鳥取県、1969、p.245

47)『朝鮮公論 17 (3) ([192]) 3月號』、朝鮮中央公論、1929、p.99

48)1929(昭和4)年9月7日朝刊、10頁

49)「最初より山野氏の下にあつた、大崎千代子、田中清子をはじめ東京マネキン倶楽部結成と同時に参加した新田光子他六名、六月より加わつた駒井玲子等十餘名」(前掲書 (27))

50)坂戸公顕：『姐上の名流婦人』、三耕社、1936、p.105

51)三浦幸夫：「女性美の尖端を行く マネキン・ガール その横顔をのぞく」『人の噂 1 (8)』、柳沢義三郎、1930、p.76

52)前掲書 (36)、p.83

53)「資生堂は昭和八年一月マネキンのコマイレイコを起用して東京・大阪の百貨店で美容実演による化粧宣伝をし、女性の美容に対する監視を高めて人氣を博し、さらに翌日には高木長葉氏企画によるミス・シセイドウ出演のシセイドウ・ビューティ・ファッションショー全五景をひっさげて、これを近代美容劇と称して駒井玲子の立体美容の図解と開設に合わせて実演を行った。」(『遠藤武著者集 第二巻 近代編』、文化出版局、1987、p.p.251-252)

54)「婦女界主催で東京五大呉服店の出品に係る、婚礼衣裳の競技會があつたが、各商店各店が衣裳に人形に、相當苦心して出したのであらうがせつかくの衣裳を人形の拙さで、すっかりこわして、終つた。だから、人形を利用する際にはよほど注意して使はないと、反つて悪い結果を及ぼすことも、少なくない。」(『事業之日本』7 (2)、事業之日本社、1928、p.85)

55)「東京一流の百貨店に飾られてある美人人形は大抵人形師から借りて陳列してゐるので、人形一個の借賃が一ヶ月五十圓から百圓以上もすると聞いては、驚かずにはゐられまい」(前掲書(54)、p.84)

56) 朝日新聞、1929年6月4日朝刊、11頁

57) 読売新聞、1929年6月25日朝刊、3項

58)『サラリーマン = The salaried man : 経済評論誌』2(7)、サラリーマン社、1929

59) 井関十二郎:『販売の常識』、千倉書房、1931、p.p.196-197

60) 1931年時事新報社刊行の『商売新戦術』において、昭和5年に鳥取県農会主催で三越にて行われた21世紀梨の宣伝販売や、昭和6年4月京都府乙訓郡農会主催で白木屋にて行われた筍販売、同年6月神奈川県築地郡農会主催の苺の宣伝販売や宮崎県主催の日向南瓜の宣伝販売においてマネキンガールを宣伝に使用したとの記述がみられる。

61) 東京小間物化粧品商報社編:『小間物・化粧品業界年鑑』昭和9年版、東京小間物化粧品商報社、1934、p.p.224-225

62)『婦女界』51(2)、婦女界社出版、1935、p.380

63)「往時駒井玲子氏がマネキンとして誕生して以来、この職業的意味も随分變化して來た。

彼女等が店頭に買場に立つただけで押すな押すなの盛況が現出し、彼女の持つパンフレット

が一切の説明をしてくれたのである。

現在では十分の説明をしても、聲を哽らし咽喉を痛くしてシヤベツテも尚且人を惹きつけることの出来ない状態である。(中略)

宣傳が主であるべき筈なのに、現在は殆どと云つてもよい位買上が主となつてゐる。』(『婦人文芸』4(8)、新知社、1937、p.157)

64) 横浜市鶴見高等小学校編:『職業指導の研究』、横浜市鶴見高等小学校、1940、p.54

65) 前掲書(54)、p.84

66)『人の噂』1(8)、月旦社1930、p.77

### 参考文献

『國文學：解釈と教材の研究』38(6)(557)、學燈社、1993

川井ゆう:「服飾を支える肢体——第二次世界大戦までの日本における「マネキン」について」『風俗：日本風俗史学会会誌』35(3)(127)、日本風俗史学会、1996

永井ゆう:『等身大人形ディスプレイの文化史的研究：近世の宗教行事・民衆娯楽から近代ファッション産業まで』、国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/3137533>

永井善久:「【再録】 マネキンガール——ショーウィンドーをめぐる政治学——」『明治大学日本文学第32号』、明治大学日本文学研究会、2006